

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：31103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370647

研究課題名(和文) 積極的なコミュニケーション力を養成するための英作文教材の開発研究

研究課題名(英文) Development of an English writing textbook for acquiring active communication skills

研究代表者

高橋 史朗 (Takahashi, Fumiaki)

八戸工業大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：20316342

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学習者のコミュニケーション上の不安を取り除くための英作文テキストを試作している。自信を持って英文を構築できるよう、本テキストは特に語順の学習を中心に構成されており、基本となるスタイルを繰り返し使用することで、英語の構造を自然に理解できるよう工夫している。また、適切に長い英文を理解・使用できるよう、句と節の組み立てに重点を置いたことも特徴となっている。

統制群および実験群について、テキスト使用後の同一テストの平均点の差を比較でも、実験群の平均点が有意に高かった。効果量も大きく(Cohen's $d = .77$)、学習者アンケートも好意的な評価であった。

研究成果の概要(英文)：In this study we have compiled a prototype textbook in English writing which will relieve the Japanese students' fear of making mistakes in English communication. In order to let them construct a syntactically correct sentence easily and confidently, the textbook emphasizes the word order. By repeatedly using the simplified sentence style composed of S + V (+ O/C + how + where + when), the learners naturally get accustomed to the basic structure of English. We also put much stress on the word cluster. The three out of five chapters of the textbook show the way to compose phrases and clauses for the purpose of letting the students understand and use a longer sentence properly. The post hoc comparison of the test scores of control and treatment groups indicated a significant difference, with the effect sizes both being 'large' (Cohen's $d = .77$). The post hoc student survey also revealed clearly the participants' quite favorable attitudes to the use of the textbook.

研究分野：英米文学

キーワード：英作文 教材開発

1. 研究開始当初の背景

文部科学省は平成15年に『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』を策定したが、平成23年に同省の検討会が取りまとめた「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(以下「提言と施策」)は、上述の行動計画について、「必ずしも目標に十分に到達していない」部分があるため、「課題や方策を今一度見直すことが必要」と指摘している。

「提言と施策」は、「臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を「求められる英語力」の例に掲げている。その実現には、誤りを恐れず能動的に英語を用いる意識と短時間で英文を構成する力が必要である。しかし、日本人の学習者は、「可能な限り誤りのない英語」を使いたいと考えがちであって(古徳他、筑波学院大学紀要第1集)そのような不安は「言語習得にネガティブな影響を与える」ことになる(八島、外国語教育研究第5号)。

一方、英文構成能力の育成に効果的なタスクについては、検証が必要な段階にあり(Kobayakawa, 2011, p. 41)、日本人の文化的傾向を考慮して、誘導作文に力点を置いた、短文中心の英作文テキストの開発と教育効果の検証は極めて有意義である。本研究は、以上のような背景から日本人学習者の積極的な英語コミュニケーション能力を高める英作文テキストの開発を目指して実施された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の最大の目的は、日本人学習者の心理的傾向に配慮しつつ、短時間で英文を構成できる力を涵養するテキストを試作することである。誤りを恐れずに済むよう標準的な語順を定型化し、それを核として、準動詞や接続詞を含む部分を追加することで、学習者が文意を膨らませられるようデザインすることとした。そこで、開発にあたり以下の方針を設定している。

文意が誤りなく伝わる英文の作成法に特化した明快な説明で、学習者の不安を可能な限り取り除く。

誘導作文を多用し、正確な英文を多く作ることを経験させる。

文全体をいくつかのブロック(chunk)あるいはクラスター(cluster)に分けることで、標準的な語順を効果的に運用して、素早く英文を構成する力を涵養する。

コミュニケーション上受容可能と考えられる軽微な誤りについては、その是非を問わずに済むよう、解説や練習問題の出題方法を工夫する。

(2) 第二の目的は、テキスト及びそれを使用した指導の効果検証である。テキストは大学において実践的に活用されなければならない。そこで実際に授業で試作品を使用し、教

育上の効果と学生の使用感・満足度を調査する必要がある。そのために効果測定用の試験を計画することとした。

(3) その他の目的として、試作品の適切な改訂、試作品および効果検証結果の発表、試作品の上梓へ向けた準備を掲げて研究は実施された。

3. 研究の方法

(1) リメディアル英語のテキスト開発といったこれまでの教育研究実績を考慮して、八戸工業大学の高橋史朗と東北工業大学の高橋哲徳がテキストの執筆と改訂、本学の斎藤明宏が効果検証を主に担当することとし、研究体制を整備した。研究の実施にあたっては、担当者間で十分に連絡を取り合い、円滑に研究が遂行できたことを付記したい。

(2) テキストの開発は、研究者間の連携のもと以下の手順で進められた。

大学生用英作文テキストなどを分析して、学習者の心理的負担に繋がる記述や説明上の工夫の欠如、学習課題の配置や難易度等に関わる問題点を明らかにする。

学習者に基本的な語順を繰り返させることでその定着を可能にしつつ、ある程度複雑な文意を伝えられる文章を構築するための文法的知識も得られるよう、必修ルールを明確化するとともに、テキスト全体のレイアウトを工夫する。

試作品に繋がるハンドアウト、初回試作テキスト、最終試作テキストを作成し、その都度改訂を行うことで、解説の正確性や練習問題の妥当性を高めるとともに、学習者と指導者の双方にとって使いやすい形式となるよう配慮する。

使用する英文には使用頻度の高い語彙を用い、英文としての妥当性はネイティブチェックを委託して確認する。

上記各項目については、研究者間で高頻度の打ち合わせを行い、各時点で適切に構成を行う。

(3) 効果検証は、開発テキストを変数とし、実験群と対照群を構成することで成績の差を比較し、その差をもって効果を推定する準実験デザインで実施した(委細後述)。また、開発テキストの学生の評価は、質問紙によって引き出した。

4. 研究成果

(1) 開発したテキストの主たる特徴として以下を掲げることができる。いずれも従来の英作文テキストには見られない、あるいは、極めて不明瞭な叙述にとどまっている要素であり、本研究の独創的な成果となっている。

「主語+動詞(+ +どのように+場所+時)」を英文の基本スタイルとして提示した。「+」の部分には目的語あるいは補語

を入れることになるが、この両者の区別が理解できていない学習者であっても、日本語を英文にする場合、どの要素をどこに配置するのかを概ね理解することができる。試作テキストでは、第1章の前半部分で、第1~3文型の単文を用いて、この基本スタイルを繰り返して練習できるよう配慮している。もちろん本来副詞(句)の配置は自由度が高いが、あえてそれを固定的であるかのように見せることによって、誤りのない英文を作っているという安心感を学習者の心理に醸成することがその目的である。

動詞形の説明は第2章に配置した。この部分の説明は文法に偏りがちだが、正確なコミュニケーションには、不可欠な表現である。そこで、簡明を期するとともに法ではなく時制に特化する、単なる語形選択ではなく語形を選んだうえで作文する形式の練習問題を多く取り入れるといった工夫を凝らすとともに、第1章の直後に置くことで、基本スタイルの定着にも貢献できるよう配慮した。

第2章に続いては、名詞修飾(=形容詞)、副詞、名詞を学ぶ第3~5章を配置した。より長い英文を構成するための課題が並んでいることになる。直近の名詞を説明する形容詞(句・節)から始め、離れたところにある動詞なども説明できる副詞(句・節)を学んだうえで、より大きなまとまりとして名詞(句・節)を学習できるようレイアウトした。

上述のような工夫の結果、文法中心のテキストとの相違点が明らかとなっている。例えば準動詞は、第3~5の各章で繰り返し学習する。文法を学ぶ上では効率性に欠けるかもしれないが、「名詞に説明を加える」といった作文上の目的に即した達成目標を明確化することを可能にするとともに、繰り返し学ぶことによる文法の徹底も期待できる。試作テキストでは、前置詞、準動詞、接続詞、関係詞などについて、意図的に説明を重複させている。

会話に現れ得る表現を網羅したテキストとするために、文法的な説明が多くなる仮定法のようなタイプの文章も、巻末に補弼としてまとめている。従来型の英作文のテキストでは、そのような文章も作成させているが、結果として文法の説明に終始してしまっている。試作テキストでは、それらを補弼として扱うことで、学習者が基本的に集中することを求めることとした。また、このようなケースでも基本スタイルの利用、クラスターの意識化は徹底している。

つまり、第1章で学ぶ基本スタイルを、これらすべての学習で繰り返すことが、試作テキストの最大の特徴である。例えば不定詞は、従来の「to+動詞の原形」ではなく、「to+動詞の原形(+以下)」と説明される。基本スタイルを繰り返すことで、学習者に自分は誤っていないと確信させる効果も期待できる。

(2) 前述の通り、本研究では初回試作品と最終試作品の2つを開発することができた。

初回試作品 Basic Strategies for Writing (図1)は、全47ページで、その前段階の授業ハンドアウトと形式的な特徴を共有している。解説の直後に練習問題を配置しているため指導しやすいが、問題数が限られていた。

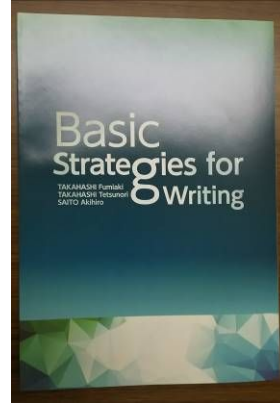


図1 初回試作品

また、説明の網羅性に欠ける点も否めなかった。またこの研究は今次研究費の最終年度以降、最終的にテキストを上梓して、成果を社会的に還元することを目標としているが、大手出版社の編集者からの意見として、より一般的なユニットの構成(説明部分数ページの後に練習問題をまとめるスタイル)が望ましいとの意見があり、それらが課題となっていた。

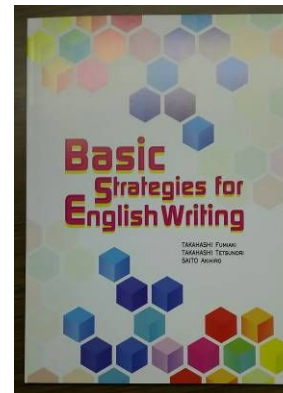


図2 最終試作品

図2に示した最終試作品 Basic Strategies for English Writing は全130ページにおよび、上記初回試作品の課題を解決したプロトタイプとなっている。解説は大幅に追加され、練習問題の分量もほぼ2倍となった。一方、指導のしやすさにも配慮して、解説の後には例題を追加している。例題にはヒントと詳細な「考え方」を

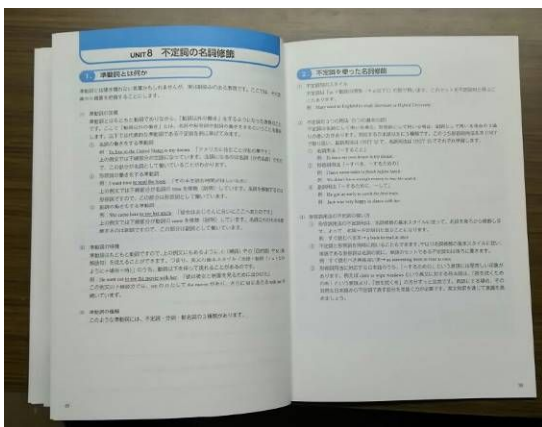


図3 解説ページ

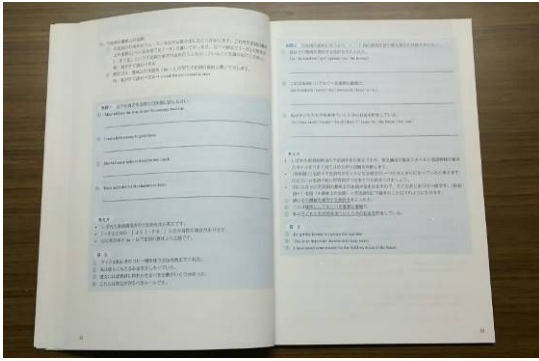


図 4 解説と例題

加え、学習者の自主的学習がなるべく容易になるよう配慮している。解説と例題のページ例を図 3~4 に示す。様々な工夫をこらした結果として、リーディングや英文法の授業のサブテキストとしても利用可能なデザインとすることができた。なお、参考のために目

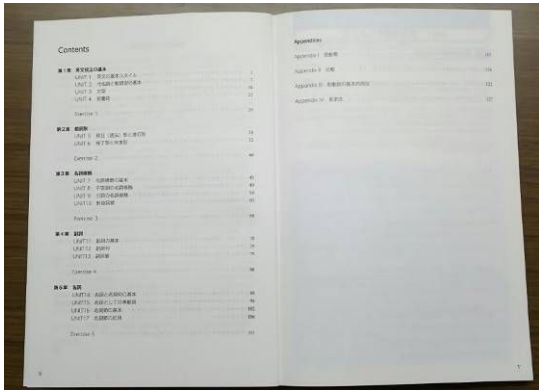


図 5 目次

次ページを図 5 に示す。

(3) 2014 年度には、研究代表者が八戸工業大学において初回試作品を用いた授業を行い、その効果を統計処理して検証した。結果については以下の通りまとめられている。

プリ・テストにより実験群クラス A ($n = 29$) と統制群クラス B ($n = 31$) を構成した。実験群には開発テストを用いた指導を行ったのち、プリ・テストと同一の問題でポスト・テストを行った。

平均点はそれぞれ 71.4 点と 54.5 点であった。その平均値の差を、対応なし t 検定で検討した。

その結果、 $t(58) = 3.00, p = .004, d = 0.77$ で有意差があり、クラス A のほうが有意に英作文の成績が高くなっていることがわかった。また、効果量 (Cohen's d) も大きく、テキストの有効性が推定された。

また、受講生に対しては、質問紙による試作テキストを利用した授業に対する評価調査も実施している。その結果を図 6 に示す。わかりやすいといった肯定的な評価がほぼ 90% を占め、総じて好評であったことから、

試作テキストが学生の作文力を向上させるために有益であると判断している。また、「興味が湧いた」「取り組みやすい」「斬新」といった評価は、積極的あるいは自主的な学習に、本研究成果が資するものであることを示している (下図)。なお、これらの分析結果はコミュニケーション教育に関わる国際会議で報告している。

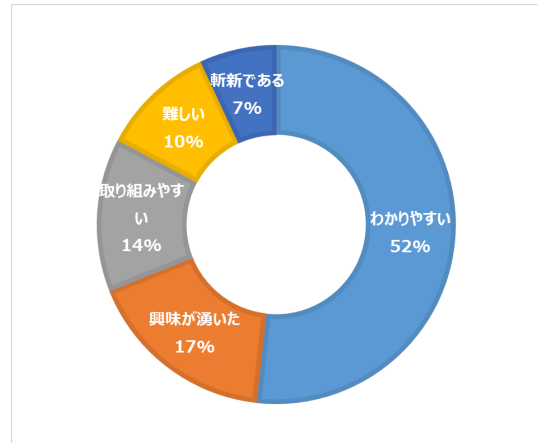


図 6 学習者からの評価

(4) 研究代表者は上述の通り、試作品を用いた授業行っており、指導者としての利用所見をここに付しておきたい。

授業はテキストに即して実施したが、受講生の作文能力は、十分に伸長していると評価できる。これは上述の分析結果に表れているが、授業内でのパフォーマンスについても指導者として目を見張るほどの向上を実感している。

特に語順、前置詞の選択 (欠落の回避)、形容詞句の配置は、授業開始前に比較して大きく改善している。

課題は、文章構成に必要な時間の短縮である。もちろんこの点についても顕著な能力の伸長は見られるが、会話の授業との連動や会話訓練との組み合わせを行うことによって、さらに向上するものと考えられる。

(5) 上述の大手出版社には、度々本試作品の意義や目的等を説明してきた。内容について理解を得て、既に上梓に向けた協議を開始している。そこで本研究費の助成期間は満了するものの、研究者間では、本テキストが可能な限り早期に出版されるよう、今後も協働して校正等の必要な作業にあたることを申し合わせている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

Saito Akihiro, Fumiaki Takahashi,
Tetsunori Takahashi

Development of a writing skills textbook
for EFL, with an emphasis on word order and
sentence structure

Asian Conference on Education 2015

The Art Center Kobe, Kobe, Japan

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

試作テキスト

Basic Strategies for Writing

TAKAHASHI Fumiaki, TAKAHASHI Tetsunori,

SAITO Akihiro

2015年4月

試作テキスト改訂版

Basic Strategies for English Writing

TAKAHASHI Fumiaki, TAKAHASHI Tetsunori,

SAITO Akihiro

2016年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 史朗 (TAKAHASHI, Fumiaki)

八戸工業大学・感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

研究者番号: 20316432

(2) 研究分担者

高橋 哲徳 (TAKAHASHI, Tetsunori)

東北工業大学・共通教育センター・准教授

研究者番号: 40265137

斎藤 明宏 (SAITO, Akihiro)

八戸工業大学・基礎教育研究センター・講師

(3) 連携研究者

なし